

81 山川 世探 706

世界史
探究

羽田 正
岸本美緒
久保文明
南川高志

新世界史

令和5年度用
(2023年度用)

山川出版社
内容解説資料

この資料は令和5年度用高等学校
教科書の内容解説資料として
一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に
則っております。

考える歴史の
時代に向けて
新しく生まれ変わった
『新世界史』

山川出版社

ダイジェスト版

第I部 世界史へのまなざし

..... 8

- 第1章 人類の歴史と私たち 8
 - 1 地球環境からみる人類の歴史 9
 - 2 日常生活からみる世界の歴史 13

先史時代は「世界史へのまなざし」で扱ってます。

第II部 諸地域の歴史的特質の形成

..... 16

- 第2章 古代文明の特質 18
 - 1 文明の誕生 20
 - 2 古代オリエント 22
 - 3 古代の南アジア・東南アジア・オセアニア 26
 - 4 古代の東アジア 30
 - 5 アフリカと南北アメリカ 34
- 第3章 アジア諸地域の国家と社会 37
 - 1 中国帝政国家の形成 38
 - 2 北方ユーラシアの動向 44
 - 3 分裂と融合の時代 47
 - 4 隋唐帝国と東アジア 52
 - 5 南アジア・東南アジア 57
- 第4章 西アジアの帝国と古代ギリシア 63
 - 1 古代西アジアの帝国 64
 - 2 古代ギリシア 67
 - 3 ヘレニズム時代 72
- 第5章 古代ローマ 75
 - 1 ローマの発展と帝国形成 76
 - 2 ローマ帝国の繁栄とキリスト教 79
 - 3 ローマ帝国の衰退 84
- 第6章 ヨーロッパの形成とイスラーム教の誕生 87
 - 1 古代から中世へ 88
 - 2 カール大帝とヨーロッパ 92
 - 3 イスラーム教の誕生とカリフの政権 97



第III部 諸地域の交流・再編

..... 104

- 第7章 結びつくユーラシアの諸地域 106
 - 1 イスラーム教とムスリム政権の広がり 107
 - 2 宋と周辺諸国 113
 - 3 モンゴル帝国 120
- 第8章 キリスト教ヨーロッパの成熟と交流 125
 - 1 教皇権の確立と十字軍 126
 - 2 ヨーロッパの膨張と成熟 133
 - 3 ヨーロッパの危機と再生 142
- 第9章 交易の進展と東アジア・東南アジア 151
 - 1 東西交流の動向 152
 - 2 明代の朝貢世界 156
 - 3 大交易時代の東アジア・東南アジア 160
- 第10章 アジア諸地域の再編 165
 - 1 オスマン朝 166
 - 2 サファヴィー朝とムガル朝 170
 - 3 清朝支配の拡大 175
 - 4 清朝の近隣諸地域 180
- 第11章 ヨーロッパの成長と世界の一体化 183
 - 1 ヨーロッパ人の海洋進出 184
 - 2 世界の一体化とその進展 188
 - 3 近世の始まり 192
 - 4 宗教改革 197
 - 5 主権国家体制の成立 201
 - 6 オランダの覇権から英・仏の抗争へ 206
 - 7 北・東ヨーロッパの動向 212
 - 8 近世ヨーロッパの思想と社会 216

アジアの交易の発展と、アジアの諸帝国の繁栄を2章にわたって取り上げました。



【本書の使用上の注意】

暦.....西暦を使用し、必要により中国暦・ロシア暦などを用いて説明した。

在位・在任・生没.....原則として元首は在位・在任年を、他の人物については生没年を付記した。

外国語の仮名表記.....人名および地名は原語に近づけて表記するようにしたが、慣用の定着しているものはこれに従った。

資料引用.....できるだけ必要な部分にとどめたが、前略・後略は特別には記さなかった。また、読みやすく書き改めたところもある。出典は文末に()の形で示した。出典の記載されていないものは筆者訳である。

第IV部 諸地域の結合・変容

..... 220

第12章 国民国家と近代民主主義社会の形成 222

- 1 商業社会と産業革命 223
- 2 アメリカ革命 226
- 3 フランス革命とナポレオン 230
- 4 反動と改革 236
- 5 1848年の諸革命 241

第13章 新国家の建設と世界市場の形成 245

- 1 アメリカ合衆国の発展 246
- 2 ラテンアメリカとカナダ・オーストラリア・ニュージーランド 251
- 3 イギリスとフランスの繁栄 255
- 4 クリミア戦争とヨーロッパの再編 258

第14章 アジア諸地域の動揺 265

- 1 西アジアの動揺 266
- 2 南アジア・東南アジアの動揺 271
- 3 東アジアの動揺 276

第15章 帝国主義と世界 283

- 1 現代社会の特質 284
- 2 帝国主義と列強 286
- 3 アジアの民族運動 293

第16章 第一次世界大戦 303

- 1 第一次世界大戦とロシア革命 304
- 2 ヴェルサイユ体制と欧米諸国 310
- 3 アジアの動向 316

第17章 第二次世界大戦と諸地域の変容 325

- 1 世界恐慌とファシズム 326
- 2 第二次世界大戦 336
- 3 戦後の世界と冷戦 341
- 4 アジアにおける冷戦 345
- 5 冷戦の展開 351



第V部 地球世界の課題

..... 357

第18章 第三世界の形成と世界経済の動揺 358

- 1 第三世界自立の模索 359
- 2 世界経済の動揺と第三世界の動向 364

第19章 今日の世界 369

- 1 紛争解決への取り組みと課題 370
- 2 経済のグローバル化と格差の是正 377
- 3 科学技術の高度化と知識基盤社会 387

課題学習 地球世界の課題の探究 392

索引 394

表見返し 世界の自然・世界の気候区分

裏見返し 現代の世界

70を超えるコラムで歴史を深掘りします。

コラム

| | | |
|------------------------|-----------------------------|------------------------------|
| 民族集団「漢族」の形成 33 | 琉球とマラッカ 158 | 三角貿易の背景 277 |
| 華夷思想 39 | 北虜南倭 161 | 帝国主義の時代 292 |
| 儒学と皇帝政治 42 | デヴシルメとイエニチェリ 168 | アジアの民族運動と日本 302 |
| 司馬遷と『史記』 43 | イスファハーンは世界の半分 171 | 第一次世界大戦の歴史的意味 309 |
| 遊牧国家の特質 46 | ヨーロッパからみた中国 179 | 国際平和の思想と国際連盟 309 |
| 朝貢体制 51 | 近世日本の対外関係 181 | ロシア革命とソ連の体制問題 315 |
| 長安の都 55 | 生物交換と「伝統文化」 188 | パレスチナ問題の起源 317 |
| 仏教の展開 57 | 近世ヨーロッパ国家と王位継承 194 | 第一次世界大戦後のアジアの民族運動 320 |
| インド洋海域世界 59 | 近世ヨーロッパと戦争 205 | 日本の植民地統治 324 |
| ヒンドゥー教 60 | 啓蒙の諸相 217 | ヒトラーとナチ党 329 |
| 軍事大国スバルタ 70 | エネルギー革命 225 | 歴史の教訓 335 |
| ヘレニズム 73 | アメリカ合衆国建国の特徴 229 | 日米開戦 338 |
| ローマ市民権と「ローマ人」 81 | 複合革命 232 | 大戦中の戦局と外交 340 |
| ローマ帝国社会の変容 85 | 大西洋革命 233 | 冷戦 343 |
| ローマ教皇 91 | 国民国家とナショナリズム 239 | 日本の敗北と占領 347 |
| イスラーム教 97 | 経済学の時代 240 | ハンガリーの悲劇 355 |
| スンナ派とシーア派 101 | 選挙制度 244 | 「ニクソン・ショック」とニクソン外交 365 |
| イスラーム教と男女平等 112 | 白人入植による新社会 249 | 核軍縮 371 |
| 科挙 119 | アメリカ合衆国の特異性 250 | 黒人大統領の登場 376 |
| 十字軍 130 | 移民の流れ 254 | 2つの和解の試み 379 |
| 荘園制と村落 132 | 植民地主義 257 | 人権と人権外交 379 |
| 俗語とラテン語 135 | ロシア「大改革」 259 | イランをめぐる国際情勢 381 |
| ユダヤ人 141 | サン＝シモン主義 264 | 中国と南シナ海・東シナ海 386 |
| ルネサンス 150 | アフガーニーとパン＝イスラーム主義 270 | |
| ソグド人 155 | インド社会とイギリスの支配 273 | |

諸地域の歴史的特質の形成



カラカラ帝(在位211~217)の浴場跡

ローマ帝国の元老院議員で歴史家のタキトゥスは1世紀末に公刊した作品『アグリコラ』には、帝国の属州となったブリテン島での属州総督アグリコラの活躍が記されている。イタリアから遠く離れた領土でのローマ人の活動をみてみよう。

2世紀の世界

部扉では、年表と地図で、部でとりあげられる時代の大きなタテの流れを把握し、世界のヨコのつながりを展望できます。

粗野な生活を営んでいるたしな民族を快適な生活を通して、平和と恵みになしませようと、あるいは個人的に説得しあるいは公的に援助したりして、神殿や市場や家を建てさせた。・・・酋長の子弟に教養学科を学ばせ、資性に磨きをかけさせた。・・・その結果、いままでローマ人の言葉・ラテン語を拒否していた人まで、ローマの雄弁術を熱心に学び始めた。こんな風にしてローマの服装すら尊重されるようになり市民服が流行した。そして次第に横道にそれだし悪徳へと人を誘うもの、たとえば追遠柱廊、浴場、優雅な饗宴に耽った。これを何も知らない原住民は、文明開化と呼んでいたが、じつは奴隷化を示す一つの特徴でしかなかった。

(タキトゥス(国原吉之助訳)『ゲルマニア アグリコラ』)

資料からの問い

- ① 資料からローマ人が生み出した文化が何かをさがし出し、その性格を考えてみよう。
- ② ローマ帝国の支配は被征服地にどのような影響をもたらしただろうか。属州となっていた諸地域がローマ帝国衰退後どうなったか、考えてみよう。

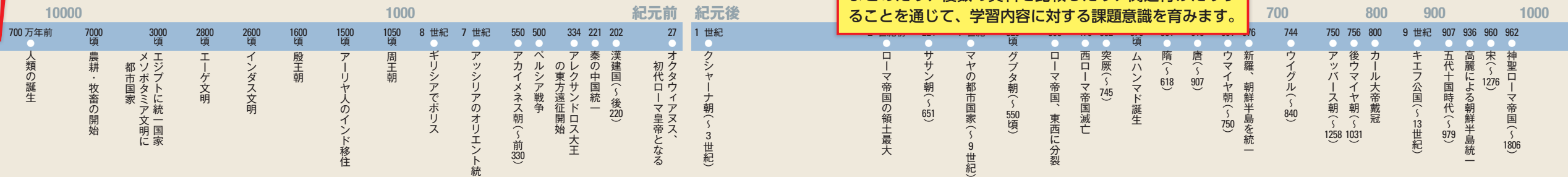
第II部では、人類最古の文明の誕生から始めて、古代の諸地域の発展と国家形成の過程を学ぶ。古代において、人類は実に多くのものを生み出した。人々は今日の政治や社会の基礎的な仕組みやそれに関する考え方をつくり出し、現代世界でも多数の人々の信仰を集める仏教、儒教、キリスト教なども古代に誕生した。イスラーム教もこうした古代の宗教の影響を受けて、7世紀に成立したのである。

古代が残した人類史上もっとも重要な事績の1つは、「国家」の創出である。人類は、前3千年紀以降、現代生活の始原といってよい都市的な生活を世界各地で生み出し、そうした都市から国家が誕生した。人類最初の国家は、おむね都市国家の形態をとったのである。その後、ほとんどの地域では都市国家はより大きな国家へと統合されていき、さらにそれらの国家も強大な軍事力をもつ国家に組み込まれた。広大な地域を領有し人々の集団を多数支配する「帝国」の出現である。

古代に現れた帝国のうち、地中海周辺地域を中心にアルプス以北のヨーロッパ内陸部や中東地域まで支配したローマ帝国と、東アジアに統一国家を現出させた秦漢帝国とは、その広い領土を中央集権的な支配のもとにおいただけでなく、法にもとづく統治や官僚、そして宗教を背景にした支配の理念まで備えた点で特記に値し、後世にもその価値が継承された。

帝国は悲惨な戦いをともなう征服活動で多くの人々を支配下に入れたが、その統治下で長く平和を実現し、経済活動を活性化させ、都市的な生活を広めた。また、帝国の強大な政治力は周囲の地域に影響をおよぼし、諸地域の交流をうながした。オアシスの道(シルク=ロード)をはじめ、陸と海の交易路が2つの帝国の世界を結びつけた。富を有する帝国の支配者たちは芸術や建築をはじめ高度な文化を生み出すことに貢献したが、これらも周辺地域に伝播していったのである。

「資料からの問い」では、資料から情報を読み取ったり、まとめたり、複数の資料を比較したり、関連付けたりすることを通じて、学習内容に対する課題意識を育みます。



本文に対して、**着眼点となる問い**を適宜設け、考察をうながします(解答例と解説は教授資料授業実践編に掲載しています)。

古代オリエント



シュメール人の都市ウル・ジグurat(聖塔) 最上部に神殿がまつられている(復元)。

Q メソポタミアでは王朝の興亡が激しかったが、その原因として考えられることは何だろう。

① 古代ローマ人の言語であるラテン語で「日がのぼる地」を意味する言葉から派生した。



ハンムラビ法典碑 上は楔形文字で書かれたハンムラビ王発布の法典碑の一部。この法典から、当時王が神の代理として統治しており、「目には目を、歯には歯を」の同害復讐の原則に立つ刑法を定めていたものの、被害者の身分によって異なった刑罰を科していたことが知られる。下は碑上部の浮き彫り。

② ヒッタイト人は前17世紀にアナトリア高原に王国を建て、鉄器を本格的に使用し、勢力を拡大してシリアでもエジプト王国と戦った。

③ 古代ギリシアの歴史家ヘロドトス(→p.71)の言葉である。

メソポタミアとエジプトの文明

西アジアからエジプトにかけての地域は、ヨーロッパからみて東方にあたるためオリエントと呼ばれた①。とくにティグリス川とユーフラテス川の両大河に挟まれたメソポタミア地方やナイル川の流域では早くから灌漑農業が展開され、人々が都市的な定住地を形成するようになり、いち早く高い文明を実現した。

メソポタミア地方では、南部を中心に前3000年頃から大きな村落が都市へと成長していき、ウル・ウルク・ラガシュに都市国家が誕生した。その担い手はシュメール人であり、その都市国家では王が政治や軍事の権限をもち、都市の神をまつて人々を支配した。シュメール人は楔形文字を発明し、粘土板にそれを記したが、楔形文字は、のちに支配民族が交替しても長く用いられ続けた。彼らはまた、六十進法や1週7日制をつくり、英雄伝説『ギルガメシュ叙事詩』も残している。

シュメール人の都市国家は、前24世紀にサルゴン1世に率いられたアッカド人によって征服された。彼らはメソポタミアからシリアに至るまで広い地域を支配下に入れたが、前20世紀頃にはアムル人にかわられた。

アムル人はバビロンに都をおき(バビロン第1王朝)、前18世紀頃にメソポタミア全土を支配下に入れたハンムラビ王は、運河や法制度の整備につとめた。

アムル人の王朝は、前16世紀初めにアナトリア高原からメソポタミアへ遠征してきたヒッタイト人に滅ぼされた。王朝滅亡後のバビロニア地方にはカッシート人が侵入して王朝を建てた。メソポタミアの北部ではミタンニ人が国を築いて、シリアに至るまで支配したが、前14世紀にはやはりヒッタイト人に滅ぼされた。このように、開放的な地形で、かつ豊かな富をもつメソポタミアには、周辺の諸民族がつぎつぎと移動して、王朝の交替や国の乱立が激しかった。

一方、エジプトでは、閉鎖的な地形のために外部からの侵入が少なく、エジプト人の歴史が長く続いた。「エジプトはナイルのたまもの」②といわれるように、エジプトはナイル川の定期的な増水と氾濫で上流から肥沃な土壌が

資料から考える 古代オリエントの諸勢力の変遷



前2000年頃のオリエント

Q エジプトとメソポタミアにおける国家・王朝の興亡の違いを地形的な要因から考えてみよう。



ギザのピラミッド(右奥)とスフィンクス 最大であるクフ王(前26世紀頃)のピラミッドは、高さ約150m、底辺230mの大きさがある。人頭獣身のスフィンクスの像はこのギザのものが有名であるが、バビロニアにもあり、ギリシアでも謎かけの伝説で知られる。



前1500年頃のオリエント

くわしく見る
ロゼッタ=ストーン



神聖文字
民用文字
ギリシア文字

運ばれるため、農業に好都合な土地であった。治水のためには住民の協力だけでなく人々を率いる強力な指導者も必要であったので、村落はしだいにまとめられて、前3000年頃には王(ファラオ)がおさめる統一国家ができあがった。王は生ける神として政治をおこない、少数の神官などを別にして、大半の住民は租税と無償労働を課される不自由な農民であった。

エジプトの歴史は、繁栄した時期の王朝に注目して、古王国・中王国・新王国と3期に区別される。古王国の時代は、ナイル下流域のメンフィスを中心に繁栄し、王の墓と考えられるピラミッドづくりがなされた。中王国の時代は中心地がナイル中流域のテーベに移ったが、その末期に遊牧民のヒクソスがシリアから侵入し、ナイル下流域を支配した。前16世紀におこった新王国

「資料から考える」では、注目させたい地図・図表・図版などをとりあげ、それに対して問いを設け、資料の読み取りと、追究をうながします。

ロゼッタ=ストーン 1799年、フランスのナポレオンのエジプト遠征時(→p.234)に、ナイル川河口のロゼッタで発見された。エジプト人は、墓室や碑に刻むためにヒエログリフ(神聖文字)を、パピルス紙に書くために簡略化されたヒエラティック(神官文字)やデモティック(民用文字)を用いた。ロゼッタ=ストーンには上段にヒエログリフ、中段にデモティック、下段にギリシア文字が書かれており、このギリシア文字をもとにしてフランスのシャンポリオン(1790~1832)が1822年にヒエログリフを解読した。

た。遺体を防腐加工したミイ

マウリヤ朝はなぜ南アジアではじめて広大な王国を形成できたのだろう。



アショーカ王の石柱頭部
サールナートの仏教遺跡で発掘された石柱碑の頭部。石柱碑はガンジス川流域に広く分布し、石柱部には勅令が刻まれていることが多い。

ガンダーラ様式の菩薩像
クシャーナ朝の本拠地ガンダーラ地方では、2〜3世紀になると顔の造作や衣の襞などにギリシア的な特徴をもった仏像が多数みられた。



グプタ様式の如来像
優雅で繊細な衣の襞に特徴がある。

ンドス川流域や南方のデカン高原に兵を進め、広大な領域を征服した。第3代アショーカ王の時代には、北インドとデカン高原の大半がこの王の支配下に入った。アショーカ王は仏教を重んじ、その思想の影響を受けた普遍的倫理である「法」(ダルマ)を統治の理想に掲げ、それを治下の各地の岩や石柱に刻ませた。しかし、この王の死後、マウリヤ朝は衰退に向かった。



マウリヤ朝の領域

その後、デカン高原では、前1世紀にサーサニアとのあいだで商品の交換が盛んにおこなわれた。また、多くのバラモンが北インドからこの王朝の領域に移住し、北インドと南インドの文化交流が進んだ。

同地域の地図を並べ、変化を追いやすくしています。

クシャーナ朝とグプタ朝

西北インドには、1世紀にクシャーナ朝が成立した。この王朝は、2世紀半ばの

王の時代に最盛期を迎え、今日の中央アジア・アフガニスタンからガンジス川流域に至る広い領域をその支配下においた。クシャーナ朝は諸宗教に寛大で、仏教も大いに栄えた。また、この時代に大乘仏教が確立し、仏像がつくられるようになった。ギリシア彫刻の手法を取り入れたこの時期の北インドの仏教美術を、ガンダーラ美術と呼ぶ。

マウリヤ朝からクシャーナ朝の時代にかけては、バラモン教にも新しい展開がみられた。祭祀を絶対とする考え方は弱まり、バラモン教の教理と様々な民間信仰が融合し、シヴァ神やヴィシュヌ神への帰依を軸とした新しいかたちの信仰と儀礼が各地でおこなわれるようになった。のちにこれらは、まとめてヒンドゥー教と呼ばれるようになった。

4世紀になると、ガンジス川中流域にグプタ朝がおり、インド北部の広い地域をその支配下においた。第3代のチャンドラグプタ2世の時代に最盛期を迎えるが、5世紀後半以後は衰えた。

グプタ朝期は、古典文化の栄えた時代として知られる。アジャンター石窟寺院の壁画やグプタ様式の仏像など、質の高い芸術作品が制作された。医学・天文学・数学が発展し、ゼロを用いた計算法が



サータヴァーハナ朝とクシャーナ朝の領域



グプタ朝の領域



アジャンターの壁画 デカン高原の岩盤に、前1〜後7世紀にかけて建造された30におよぶ石窟群がある。内部には仏塔があり、壁面にはガウタマ=シッダールタの生涯の物語が描かれている。

考案された。紀元前後に成立した生活指導書『マヌ法典』などを通じて、ヒンドゥー教がしだいに多くの人々のあいだに影響をおよぼすようになった。この頃までには、サンスクリット語というインドの古典文章語で記された二大叙事詩『マハーバーラタ』『ラーマヤナ』が、今日知られているかたちをとるようになった。また、仏教もなお盛んで、ナーランダー僧院が創建されて教学の拠点となった。中国から仏典を求めて法顕らの僧が南アジアを訪れたのは、この頃のことである。

南アジア伝統社会の形成

4世紀以降の南アジアでは、長い時間をかけてヒンドゥー教とカースト制度にもとづく社会の基本的な仕組みがゆっくりと形成された。ヒンドゥー教は、現代のイン

歴史用語・研究動向・現代とのつながりをコラムで深掘りしています。

インド洋海域世界

東西1万kmにも達する広大なインド洋の周辺各地は、一見別々の地域にみえる。しかし、夏と冬で規則的に方向をかえるモンスーン(季節風)を利用して航海すれば、帆船でこの広い海を行き来することは難しくなかった。インド洋周辺各地は、たくみな航海技術とダウと呼ばれる独特の帆船を用いた交易活動によって、古くから1つに結ばれていたのである。すでに、1世紀のエジプトで書かれた『エリュトラー海案内記』には、「ヒッパロスの風」と呼ばれるモンスーンを利用した航海技術によって、紅海からインドに至る方法が記されている。

インド洋を取り囲む各地には、それぞれ特産品があった。東アフリカ海岸は金や象牙、奴隷、アラビア半島や

ペルシアは乳香や没薬などの香料や馬、真珠を産した。インドには胡椒や綿織物、東南アジアには高級香料であるクローヴ(丁子)・ナツメグ・胡椒、それに香料や染料、獣皮などがあった。また、東南アジアでは、中国産の絹や陶磁器なども取引された。人々は各地の特産品を交換するために、船で海を渡ったのである。



おもなインド洋交易路と特産品

▶ インド洋海域を帆船が航行できる時期を調べ、イラクの港町バスラを出航した船が東南アジアのマラッカとのあいだを往復した航路と時間を確認してみよう。

し、東方にあってはクシャーナ朝を攻めてインダス川西岸まで支配を広げた。
 (→p.58)
 国内にあっては中央集権的な政治体制を整備するとともに、ゾロアスター教を国教として、国家統一につとめた。

5世紀になると、ササン朝は中央アジアからの遊牧民エフタルの侵入に苦しむようになるが、6世紀の皇帝ホスロー1世の時代にトルコ系の突厥と組んでエフタルを滅ぼし、西方ではユスティニアヌス1世時代の東ローマ帝国とも戦って優位を保つなど、全盛期を迎えた。しかし、ホスロー1世の死後に帝国は混乱してしだいに衰え、642年のニハーヴァンドの戦いでイスラーム勢力に敗れて、まもなく滅亡した。
 (→p.90)
 (→p.98)

アカイメネス朝の伝統の復活をめざしたササン朝では、国教とされたゾロアスター教の聖典『アヴェスター』が編纂された。ササン朝はペルシア人以外の民族の宗教には寛容であったが、3世紀にゾロアスター教・仏教・キリスト教を融合したマニ教を創始したマニは迫害された。ササン朝の時代には、美術や工芸などの分野で独自の発展がみられ、ガラス器・銀器・陶器、そして毛織物などの作品や技術が東西に広く伝えられて、中国を経て飛鳥・奈良時代の日本にも伝来した。

視覚的に表現した地図で、資料の考察を後押しします。

①その後、マニの教えは北アフリカやヨーロッパ、中央アジアに伝播し、唐代の中国でもマニ教の寺院がつけられた。

資料から考える 東西文化の交流

ササン朝時代の銀皿に描かれた獅子狩文

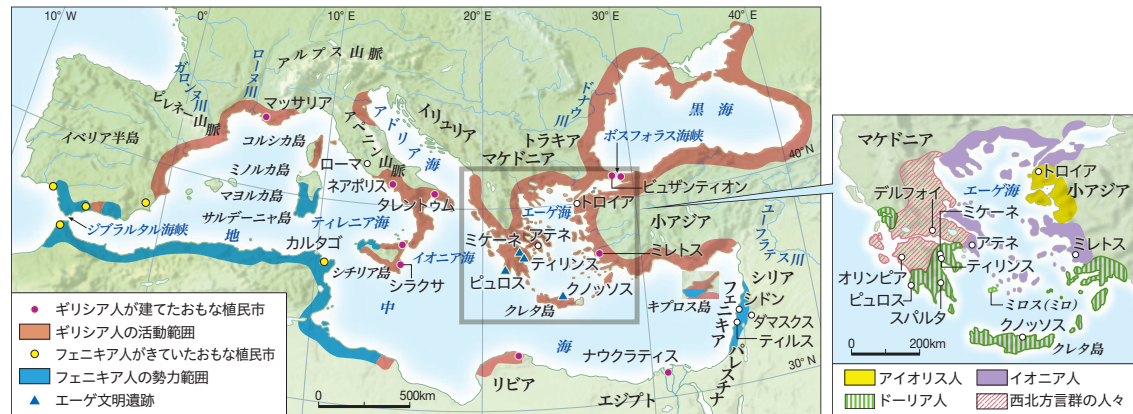
ササン朝の水瓶

唐代の鳳首瓶

正倉院の漆胡瓶

法隆寺獅子狩文錦

Q▶ ササン朝と中国、日本で同じような工芸品が使用されていた。その背景としてどのような状況が存在していたと考えられるだろうか。また、これらの工芸品にはそれぞれ違いがあるが、その違いは何によってもたらされたのだろうか。



2 古代ギリシア

異なる地域での歴史的事象を比較し、考察させる問いで、広い視野をもった学習の展開につなげます。

ミケーネ文明崩壊後、ギリシア人の居住地域では同時代の文字の記録がない暗黒時代と呼ばれる時期が約400年間続いた。この間にギリシアは鉄器時代に移行し、前8世紀になると、各地にポリスと呼ばれる共同体が生まれた。ポリスは、人々が丘(アクロポリス)の上に守護神をまつる神殿を建て、その麓に寄り集まって居住することで形成された都市共同体である。古代ギリシアの歴史を通じてポリスは1000近くあったとみられるが、それぞれが政治的に独立した都市国家であった。諸ポリスは1つの国家にまとまることはなく、たえず抗争した。しかし、ギリシア人のあいだでは自分たちを「ヘレネス」と呼び、共通の言語と神話、アポロン神の神託、オリュンピアの祭典への参加などを通じて共通の民であると認識していた。

Q ギリシアに成立したポリスと中国に成立した都市(邑)を比較した時、どのような共通点と相違点があるだろうか。

ポリスの成立と時期を同じくして、ギリシア人の大規模な植民活動が始まった。彼らは人口増加や耕地不足など様々な理由から植民を開始し、地中海沿岸や黒海沿岸などに植民市を建設した。植民市は故地と環境が似た海岸沿いに建てられ、創設されると本国(母市)から政治的に独立した都市国家となった。200年間ほど続いた植民活動によって、ギリシア人の活動領域が広がっただけでなく、交易によって商工業が発展し、ポリス内には大きな経済力をもつ者も現れた。また、小アジアのリュディア王国でつくられはじめた貨幣がギリシア人の地域にも広がり、商工業活動が促進された。

②ギリシア人は異民族を、わけのわからない言葉話す人々の意味で「バルバロイ」と呼んだ。のちになると、軽蔑的な意味を強め、野蛮な人々の意で使われるようになった。

③ミケーネ文明崩壊以降にバルカン半島からエーゲ海周辺に広がったギリシア人の集団は、方言の違いでイオニア人・アイオリス人・ドーリア人にわけられる。

④こうした植民市で現在も繁栄している都市として、イタリアのネアポリス(現ナポリ)や南フランスのマッサリア(現マルセイユ)、トルコのビュザンティオン(現イスタンブール)などがある。

ポリスの社会は、その正式構成員である市民と市民に隷属する奴隷からな

古代ローマ

イタリア半島中部の小さな都市国家から始まったローマは、征服戦争により周辺諸部族を支配し、イタリア半島から地中海周辺地域、さらにアルプス以北にまでおよぶ大帝国を建設した。当初ローマでは貴族による共和政がおこなわれていたが、従軍により発言力を強めた平民が政治的権利を獲得していき、前1世紀には強大な権限をもつ皇帝の政治がはじまった。ローマでは法律、貨幣、度量衡などが整備され、高度に発達した土木技術はローマと帝国内各地を結びつけ、広大な帝国を「ローマ人である」という認識のもとにまとめあげた。3世紀以降、周辺諸部族の侵入を受けたローマ帝国は、皇帝権力を強化して危機的状況に対応したが、帝国の辺境であった属州ではしだいにローマ帝国の支配が弱体化していった。5世紀以降のゲルマン人の大移動のなか、帝国東部では強力な統治体制により外敵を撃退したが、帝国西部ではゲルマン人の侵入を受け衰退していった。



章扉には、課題を設定し、それを追究しながら章の内容の学習を進めていくための問いかけを設けています。

- ① ローマが地中海からアルプス以北に広大な大帝国を成立させることができたのはなぜだろう。
- ② ローマではギリシアと異なり、共和政下でも貴族が政治の主導権を握り続けたが、それはなぜだと考えられるか。
- ③ ローマ帝国でキリスト教が公認されたのはなぜか。
- ④ ギリシア文化とローマ文化にはどのような共通点と相違点があるか。

朝がローマに滅ぼされるまでの約300年を、ヘレニズム時代と呼んでいる。ギリシア人の東方への拡大によって、ポリスをこえた国家体制が成立し、それともなう新しい価値観も誕生した。世界市民主義(コスモポリタニズム)の思想が生まれる一方で、政治から離れて個人の内面の幸福を追求する哲学が現れ、ストア派やエピクロス派が盛んになった①。

この時代には、ギリシア美術が彫刻の領域で「ミロのヴィーナス」や「ラオコーン」のような傑作を生み出しただけでなく、その様式は東方にも広まり、インドや中国・日本に至るまで影響を与えている。また、前4世紀にコイネー②と呼ばれるギリシア語が形成され、やがてヘレニズム時代の諸地域で標準語となった。

ヘレニズム諸王国のなかでもっとも経済的に豊かであったプトレマイオス朝では、アレクサンドリア市が経済と文化の中心として栄え、王立研究所(ムセイオン)や大図書館がつくられ、自然科学や文献学の研究が進められた③。

①ゼノン(前335～前263)を祖とするストア派は禁欲主義、エピクロス(前342～前271)が開いたエピクロス派は快楽主義をとらえた。

②「共通語」という意味。『新約聖書』もコイネーで書かれた。

③シチリア島出身の物理学者アルキメデス(前287頃～前212)や、ギリシアの数学者エウクレイデス(ユークリッド、前300頃)、サモス島出身の天文学者アリスタルコス(前310頃～前230頃)、北アフリカ出身の地理学者エラトステネス(前275頃～前194頃)がムセイオンで研究した。



「ミロのヴィーナス」ヘレニズム時代の彫刻の代表的な作品。エーゲ海南部のミロス(ミロ)島にあったポリス、ミロスの遺跡で1820年に発見された。



「ラオコーン」 トロイ伝説の神官を描いた大理石像で、ヘレニズム時代を代表する像。



ペルガモンのゼウスの大祭壇 ヘレニズム時代に繁栄した小アジア北西部の都市ペルガモンで、前2世紀につくられたギリシア神話の主神ゼウスをまつる祭壇。壮麗な浮き彫りが施されている。発掘後にドイツに移され、現在ベルリンの博物館に展示されている。

章末の問い

- ① アテネで、直接民主政が発展した経緯についてまとめてみよう。
- ② ペルシア戦争後、ギリシアのポリス社会は大きく変化していった。その理由は何だろう。

「章末の問い」では、歴史的経緯を整理したり、変化の理由や後世に与えた影響を考察させたりして、探究をうながします。

2 カール大帝とヨーロッパ

8世紀半ば以降、カロリング家とローマ教皇座がたがいに接近し、提携するに至った理由について、考えてみよう。

①現在のオランダ・ベルギー・ルクセンブルクを指す。

フランク王国の王朝交代

高度なキリスト教文化をはぐくんだイングランドの修道士たちは、7世紀末、低地地方^①やガリア以遠に住む異教徒への伝道のために大陸へと渡った。ゲルマニアへの伝道を教皇から委託されたボニファティウスは、フランク宮廷を後ろ盾に各地に修道院を建て、フランク統治下のゲルマニアのキリスト教化に貢献した。

フランク王国では、8世紀初頭、行財政を統括する宮宰の職を担ったカロリング家が勢力をのぼし、主君であるメロヴィング家の王をさしおいて統治の実権を掌握しつつあった。なかでもカール＝マルテルは、国内の教会領・修道院領を没収して王領とし、これを財源に職業的な戦士集団を編制した。カールはこの機動性ある騎馬兵を用いて国内の統一を進め、ライン右岸のゲルマニアを掌握し、ガリア南部の諸侯を王国に統合した。

この頃、ウマイヤ朝の軍勢が、ジブラルタル海峡をこえてイベリア半島に入り、711年に西ゴート王国を打ち倒した。イスラーム勢力は、北部を残して半島全体を制圧し、15世紀末まで存続するアンダルス(イスラーム統治下のスペイン)を形成した。ウマイヤ朝の軍勢はさらに、ピレネー山脈をこえて西南フランスに侵攻したが、732年、トゥール・ポワティエ間の戦いで、カール＝マルテル率いるフランクの騎馬軍に敗北を喫した。

カール＝マルテルの息子ピピン(小ピピン)は、メロヴィング家の王を廃位し、教皇の認可を得たうえで、古都ソワソンにてフランク王に推戴された(751年)。この宮廷革命によって、フランク王国はカロリング朝時代に入った。

目新しい図版で、時代のイメージをもちやすくしました。

ピピンの国王戴冠 教皇から王冠を受けるピピン。(『サドニ年代記』、13世紀)



トゥール・ポワティエ間の戦い イベリア半島の制圧を終えたアンダルスのムスリム軍は、ナルボンヌを拠点にガリアへの侵攻を繰り返していた。その目的は領土獲得ではなく、あくまで金品財宝の略奪にあった。(『フランス大年代記』、14世紀)



カール大帝時代のヨーロッパ

王位承認の見返りに、ピピンは756年、ランゴバルド王国から奪回したラヴェンナ総督領を教皇に献上した(ピピンの寄進)。この領土が、教皇座の財政基盤となる教皇領(教皇国家)の起源となった。ここに、教皇が王に権威を与え、王が教皇とキリスト教世界の防衛を引き受ける、西ヨーロッパに特有の双務の関係が築かれた。

カール大帝の皇帝戴冠とイコノクラスム

ピピンの死後、長男のカール1世(カール大帝、シャルルマーニュ)が王位を継いだ。カールは父の政策を継承し、半世紀におよぶ治世の大半を費して、南フランス・北スペイン・北イタリア・ハンガリー・ザクセンと、王国のほぼ全方向に支配圏を拡張した。さらに、遠征ごとに広がる領土の統治効率を高めるために、司教区制^⑥を全土に徹底するとともに、各地方に国王役人である伯を配置する伯領制をしいた。

一方で、カールは各地から高い学識をもつ人材を宮廷に集め、自身の顧問とした。なかでも、イングランドのアルクインは宮廷学校の校長となり、カールの文化事業の指揮をとった。国内に急増する修道院では、古代ローマの著作が正しい文法と画一的な書体で書写され、王国全土の修道院・司教座の図書館におさめられた。また、古代ローマの建築論を応用した大聖堂が建造され、貨幣にはローマ将軍風の画像が刻まれた。古典文化の復興を手掛りにしたこれらの文化政策は、カロリング＝ルネサンスと呼ばれる。



カール大帝 カール大帝は、12世紀後半に聖人に列せられた。図はその際に制作された黄金棺で、中央の人物がカール大帝。アーヘンの聖マリア聖堂に安置されている。

②カールはスペインでは後ウマイヤ朝、北イタリアではランゴバルド人、ハンガリーではアヴァール人、ザクセンではザクセン人と戦った。

③王国を、司教が監督する管区(司教区)に分割し、その上に司教を監督する大司教をおく教会組織の仕組みを司教区制という。司教の本拠となる教会は司教座、大司教のそれは大司教座と呼ばれる。

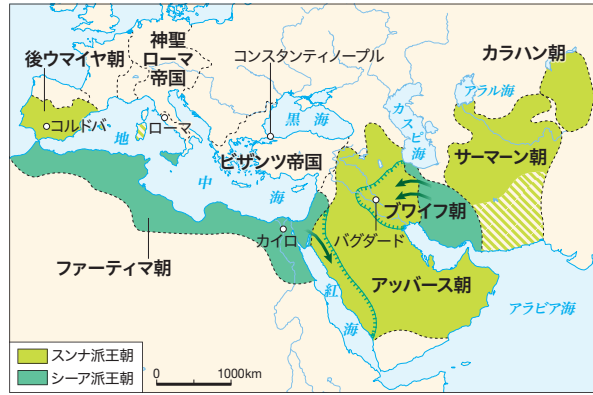
④また、王は命令の伝達、地方の実情調査の目的で、聖俗の有力者を国王巡察使(ミッシェ・ドミニキ)として、毎年、各地方に派遣した。

⑤修道院は、古典古代の文化の継承だけでなく、同時代の記録の作成(年代記)、知識人の養成など、司教座とともに、中世ヨーロッパにおける知識基盤の役割を果たした。



アズハル=モスク エジプトを征服したファーティマ朝は新都カイロを造営し、その中心にアズハル=モスクを建てた。972年に併設されたマドラサ(学院)はイスラーム最古の高等教育機関で、現在ではスンナ派教学の最高峰である。

後ウマイヤ朝の都コルドバのモスク コルドバのモスク(メスキータとよばれる)はイスラーム教のモスクであったが、現在はキリスト教の大聖堂になっている。柱は他の建物からもってきたため寸法が合わず、天井との隙間をうめる工夫として、独特の二重アーチが採用された。



10世紀のイスラーム世界

段が限られていた当時、ウマイヤ朝やアッバース朝の領域は、一人の君主が統治するには広すぎた。また地方政権が誕生した地域は、もともと地理的・文化的にひとまとまりの単位であったので、分権化が進むのは自然な流れであった。アッバース朝の時代になると、その領域全体で、アラビア語が行政のための言語として使用されるようになり、人々が日常的に使う言語も徐々にアラビア語にかわっていった。現在、アラビア語を話す人々が西アジアから北アフリカに広く分布しているのはその結果である。一方、サーマーン朝の領域である中央アジアやイラン高原東部では、9世紀末頃から住民の日常語であるペルシア語が、行政の言語としても用いられはじめた。各地でアラビア語の重要性が増す一方で、このように、一部の地方では言語の面でも自立がみられるようになった。

地方政権の1つとしてカスピ海南岸に成立した**ブワイフ朝**は、シーア派の政権であり、アッバース朝カリフの命に従わなかった。ブワイフ朝の君主は946年にバグダードを攻略したが、カリフを廃さず、その権威を利用して**大アミール(大將軍)**となり、政治・軍事の実権を握った。

ブワイフ朝と同じ頃にチュニジアにおこったシーア派の**ファーティマ朝**は、969年にエジプトを征服し、**新都カイロ**を建設した。この王朝の君主は、シーア派の最高指導者自身を認め、カリフを名乗って、アッバース朝の権威に挑戦した。

歴史的状況の成立経緯や時代による変化をまとめたり、画期に注目させたりして、章で学んできた内容の定着をうながします。

資料から考える

① **イブン=バットウータ『大旅行記』**(1326年)
 ダマスカスにおけるワクフは、その種類において、またその支出額においても算定出来ないほどの数である。[例えば]その1つに、メッカ巡礼に行けない人たちのため[に特別に設定された]、幾つものワクフがある。これは、彼らのなかの巡礼に行こうとする者に対して、十分な[旅行]費用をワクフから提供するものである。また娘たちの結婚準備のために用意されたワクフがある。これは、娘たちに十分な準備をしてやれない彼らの家族のために提供されるワクフである。さらに捕虜となった者を保釈するためのワクフや、旅人たちに食べ物、衣類や彼らの国へ[戻るため]の旅の必需品を提供するワクフがある。道路を整備・舗装するためのワクフもあるが、これは、ダマスカスの路地道はすべてその両側に、歩行者たちが通る舗装部分があるためである。一方、馱獣に乗った人たちは、その中間の道を通る。さらに、それら以外にも慈善事業を目的として[設定され]た幾つものワクフがある。
(イブン・ジュゼイイ編、家島彦一訳注『大旅行記1』より、一部改変)

Q 資料①のなかにもみられる「ワクフ」とはどのような制度のことだろうか。

Q 資料②について、タージ=マハルの維持においてワクフはどのように運用されているか。

② **イナーヤト=ハーン『シャージャハーン=ナーマ』**(1658年)
 燦然たる墓廟(タージ=マハル)が[完成に要した]12年のあいだに、その費用として500万ルビーを費やしたことは紛れもないことである。また墓庭園の周辺には数々の広場や宿泊所、商店が設けられ、宿泊所の背後に多くの食品製造工房も設立された。…かくしてこの燦然たる墓廟に設けられたワクフ制度によって、もし修繕が必要な場合にはこの寄進財産の収益でもってその支出に充当し、残余は[墓廟関係の]年俸受給者および月俸受給者に支給されるとともに、墓廟に仕える人々やその他困窮者たちのための必要な支出に充てられる。残余が生ずれば、この墓廟の豊かな財庫に繰り入れられる。
(歴史学研究会編『世界史資料2』、一部改変)

シーア派の政権があいついで成立した。しかし、その治下にあった人々がシーア派に改宗することはほとんどなく、ムスリムの大半は依然としてスンナ派に属していた。

イベリア半島の**後ウマイヤ朝**は、**ファーティマ朝**への対抗上カリフを称したので、10世紀後半には、3つのカリフ政権が並びたつこととなった。7世紀にムスリムの政権が誕生した当初は、指導者である一人のカリフにすべてのムスリムが従っていたが、10世紀頃にはこの体制は完全に崩壊してしま

文字資料から、歴史的制度とその運用がどのようなものであったかを読み取らせ、本文の理解を深めます。

章末の問い

- ローマ帝国が支配していた地中海世界は、8世紀末までに3つの文明圏に大きくわかれていった。その経緯を整理しつつ、それぞれの文明圏が何を基盤として成立しているのか、考えてみよう。
- カール大帝の皇帝戴冠は、中世ヨーロッパ世界成立の画期とされるが、その理由を考えてみよう。
- ムスリムの政権のもとで、アラブ人以外の被征服民の立場はどのように変化していったか、整理してみよう。
- カリフの地位と役割は、時代とともにどのように変化したのか、まとめてみよう。

諸地域の交流・再編



クビライに謁見するマルコ=ポーロ

13世紀後半、ユーラシアを陸路・海路でめぐる大旅行をおこない、モンゴルの元朝に17年仕えたヴェネツィア出身の商人マルコ=ポーロの有名な「世界の記述」(『東方見聞録』)をみてみよう。



グラフや地図は、カラーユニバーサルデザインにのっとり、読み取りやすい配色・模様で作製しています。

資料からの問い

- ①モンゴル帝国時代に、マルコ=ポーロをはじめとするヨーロッパ商人が東方との貿易を活発化させたのはなぜか。考えてみよう。
- ②15世紀のヨーロッパ商人は、経済的・文化的に繁栄していたアジアとどのような手段で交易をおこなおうとしたか、考えてみよう。

第II部では、9世紀頃までの世界を対象として、それぞれの諸地域で特色ある国家や宗教が形づくられる過程を扱った。仏教やキリスト教、さらにヒンドゥー教や道教、また政治体制も含めて社会全体に大きな影響を与えたイスラーム教などである。この時期に生まれてきた宗教は、今日の世界でも数億から20億の信徒をもち、人々の世界観や行動様式を支えている。まさに、現代につながる各地域の特色は、この時期につくられたといえよう。だからといって、それぞれの地域における、社会や文化のあり方が固定されたわけではなかった。

この第III部では、ほぼ10世紀から18世紀前半までの時期を中心として、これらの地域が、交流や対立のなかで社会と文化をどのように変容させ、たがいに結びついていったのか、その過程をみていくこととする。具体的には、イスラーム教圏の拡大や、モンゴル帝国の形成、ヨーロッパ勢力の膨張など実にダイナミックな動きである。そうしたなかで、諸地域相互の交流はいよいよ盛んになっていった。さらに16世紀以降、アメリカ大陸が世界の交易ネットワークに組み込まれていくと、大陸間の経済関係はより緊密なものとなり、食卓に並ぶ品々や貨幣の価値など人々の暮らしにも大きな影響を与えることとなった。その点でいえば、16世紀をグローバル化の出発点とみなすことができよう。

もう1つ、この時代の特色を忘れることはできない。それは、アジア地域が経済的にも文化的にもめざましい繁栄を誇っていたことである。その隆盛ぶりは同時期のヨーロッパ人にとって憧れの的であった。しかし、やがて変化が訪れる。第IV部で扱われる18世紀後半になり、ヨーロッパにおける科学技術の急速な発展が、アジア諸地域との力関係を大きくかえていくことになる。その時、ヨーロッパの圧力を受けたアジア地域は、ヨーロッパをまねた「近代化」を進めていかざるをえなかった。

部でとりあげる時代を概観しつつ、現代とのつながりを考えさせる記述をしています。

| 1000 | 1100 | 1200 | 1300 | 1400 | 1500 | 1600 | 1700 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------|-------------|-----------------|--------------------------------|---------------------|-------------------|-------------------|---------------|---------------|---------------|-------------------|-------------------|--------------------|--------------|-------------------|----------------------|-----------------|-------------------|------------------------|----------------|-------------------|-------------------|----------|--------------------|----------------------|----------------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------------|---------------|--------------------------|-------------------|-------------------|------------------|----------------|------------------------|-------------------|-------------------------|--------------|--------------------|---------------------|--------------------|-------------------|
| 1038 セルジューク朝(1194) | 1077 カノッサ事件 | 1096 第1回十字軍(99) | 1206 チンギス=カン即位 モンゴル帝国(1388) | 1215 大憲章(マグナ=カルタ)発布 | 1241 ヴァールシュタットの戦い | 1250 マムルーク朝(1517) | 1258 アッバース朝滅亡 | 1271 クビライ、元建国 | 1271 クビライ、元建国 | 1300頃 オスマン朝(1922) | 1339 英仏百年戦争(1453) | 1348頃 西ヨーロッパで黒死病流行 | 1368 明(1644) | 1370 ティムール朝(1507) | 1378 教会大分裂(シスマ、1417) | 1392 朝鮮王朝(1910) | 1417 コロンブス、アメリカ到達 | 1453 オスマン朝、イスタンブルを都とする | 1492 モスクワ大公国自立 | 1480 コロンブス、アメリカ到達 | 1494 イタリヤ戦争(1559) | 15世紀 最盛期 | 1501 サファヴィー朝(1736) | 1517 ルター、「九十五条の論題」発表 | 1519 マゼラン一行、世界周航(22) | 1521 アステカ帝国を滅ぼす | 1526 ムガル朝(1858) | 1533 インカ帝国を滅ぼす | 1571 レパントの海戦、オスマン軍撤退 | 1581 オランダ独立宣言 | 1588 スペイン無敵艦隊、イングランドに敗れる | 1600 イギリス東インド会社設立 | 1602 オランダ東インド会社設立 | 1613 ロシアでロマノフ朝成立 | 1618 アメリカ大陸に上陸 | 1620 メイフラワー号、アメリカ大陸に上陸 | 1640 ビューリタン革命(60) | 1643 フランスでルイ14世即位(1715) | 1644 中国支配始まる | 1648 明滅亡、清の中国支配始まる | 1661 フランス、ルイ14世親政開始 | 1688 イギリス、名誉革命(89) | 1707 グレートブリテン王国成立 |

修道会と修道士 シトー会は開墾活動を精力的に推進した。この図では、院長聖ベネディクトゥス(左)が修道士を派遣し、修道士が土地を開墾している。



オクスフォード大学

歴史的なできごとの展開した背景や因果関係が理解しやすくなるように、説明的な叙述をこころがけています。

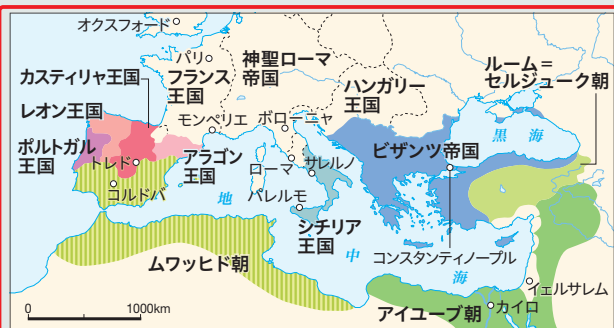
新設された都市があった。市場地として富と人が集中する都市は、貨幣経済が浸透したこの時代の為政者にとって有望な財源であった。このため、王侯は領内の都市化を推進しつつ、造幣権・市場開設権・通行税徴収権などを用いて、都市から利益を吸いあげた。

修道会の展開と12世紀ルネサンス

12世紀に入ると、華やかな典礼や聖堂の装飾に巨費を投じる従来の修道院への批判から、より厳格で質素な生活規範を掲げる新しい修道院が生まれた。これらの修道院は、1つの修道院(母修道院)からつぎの修道院(娘修道院)が枝わかれしながら数を増やし、同じ規範(会則)に従う一群の修道院は、修道会と呼ばれた。こうした修道会の先駆けであるシトー会(1098年創立)にみられるように、ヨーロッパ全体に点在する修道院は、共通の会則や母修道院による巡察、総会への出席を通じてたがいに結ばれていた。また、祈りと労働を修道士の本分とするシトー会は、その開墾技術や労働観、人里離れた未開地への志向をかわれて、開発のために森林の開墾を進める各地の領主に誘致された。

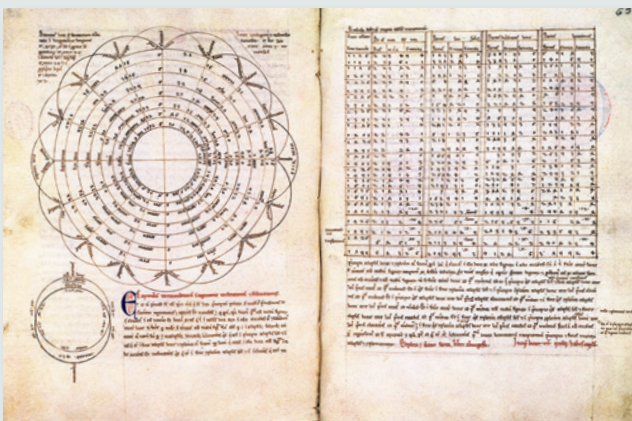
シトー会の全盛期を築いたクレルヴオーのベルナルドゥス(聖ベルナルド)は、修道院を舞台に神学を発展させ、アベラルドゥス(アベラル)ら、都市の知識人としてしばしば論争を繰り広げた。12世紀には、アラブ=イスラーム世界に継承されていた古典古代の学問が、アラブ世界との接点であるトレドやシチリア島のパレルモでラテン語に翻訳され、ヨーロッパに受容された。こうした新しい知の流入とあいまって、知識や教師を求めて各地を遍歴する修道士や学生が都市に集まり、司教座付属学校や私塾で最先端の神学や自由七科を学ぶようになった。やがて、教師と学生が学びの場を守るための団体を設立し、これが大学(ユニヴェルシタス)の起源となった。こうしてボローニャ大学の創設(1088年、法学)を皮切りに、パリ大学(12世紀中頃、神学)・オクスフォード大学(12世紀後半、神学)といった最初期の大学が誕

資料から考える 大翻訳時代と12世紀ルネサンス



12世紀の地中海世界

- ▶ 翻訳事業の中心はどこか、考えてみよう。
- ▶ 翻訳事業がどのようにギリシア・ローマ文化の復興と12世紀の知的革新に影響を与えたのか、考えてみよう。



地図を読み取りながら、歴史的な現象がどのように展開したかを考察させる問いで時代性の理解をうながします。

俗語とラテン語

ローマ帝国の行政文化を継承した中世ヨーロッパでは、公文書や法典は、原則としてラテン語で書かれた。カロリング=ルネサンス(→p.93)で文法や正書法、字体の規準が設けられ、ラテン語文法は修道院・司教座・宮廷の付属学校で教育された。キケロやカエサルの時代のラテン語(古典ラテン語)に膨大なキリスト教関連の語彙を追加し、中世固有の社会制度を反映したラテン語は、中世ラテン語と呼ばれる。ラテン語の読み書き能力(リテラシー)は聖職者・修道士にほぼ独占され、公文書や書簡などの書き言葉であっ

たのに対し、生得の俗語は話し言葉として用いられた。一方、ビザンツ帝国では、すでに9世紀以降、書き言葉と話し言葉がギリシア語(中世ギリシア語)に統一された。12世紀以降、まずは叙事詩などの文学作品において、俗語が書き言葉として用いられるようになった。13世紀に入ると、年代記や都市の記録にも、しだいに俗語が使用されるようになった。ダンテ(→p.148)は『俗語論』を著し、詩作における感情表現に、方言・俗語がいかに適しているかを論じた。ただ、この論自体がラテン語で書かれているように、学術言語としてのラテン語は近代まで残り続けた。

- ▶ 共通教養語としてラテン語が果たした役割を、西アジアにおけるペルシア語と比較してみよう。



ロマnesク建築 フランス・ヴェズレーのサン=マリ=マドレーヌ教会(12世紀)。タンパンと呼ばれる半円部分には、世界中の諸民族を庇護するキリストが描かれている。

ブトレマイオス『アルマゲスト』ラテン語訳写本 12世紀のイベリア半島、とくにトレドでは、大司教の庇護のもと、多言語話者である翻訳家たちによって古代ギリシアの著作やアラビア語学術書の翻訳・研究がおこなわれた。

ヨーロッパ中部が神聖ローマ帝国からドイツ帝国へと変化していくなかで、プロイセン王国の果たした役割は非常に大きいものであった。その役割をまとめてみよう。

①初代国王フリードリヒ1世はスペイン継承戦争(→p.209)参戦への見返りとして神聖ローマ皇帝から王位を得た。国王はブランデンブルク選帝侯も兼ねたが、その後「プロイセン」の名が、王・選帝侯家の全領土を意味して用いられるようになった。



扱っている時代のできごとが、後の時代に与えた影響にも触れ、長いスパンでの歴史的な意味に気づかせるようにしています。

フリードリヒ2世
ベルリン郊外のサンサーシ宮殿で音楽会を開き、みずからフルートを奏している。

②南イタリアはのちにスペインが奪回するが、このように国土の分断と外国支配が続いたため、イタリアの統一・独立は19世紀のことになった(→p.260, 261)。

③女性皇帝は神聖ローマ帝国では認められなかったが、オーストリア内では、男系がとれた場合の女性大公を定めており、長女マリア=テレジアの将来の継承を各国に承認させることが、18世紀前半の同国外交の重要な課題となった。

プロイセンとオーストリア

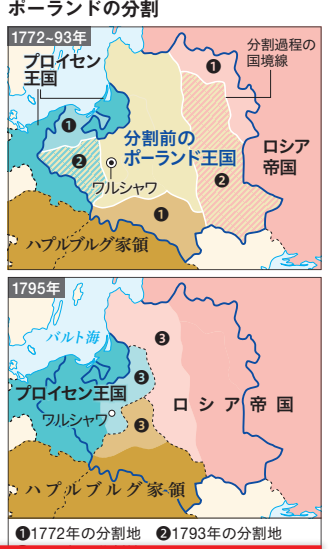
プロイセンは神聖ローマ帝国外のドイツ騎士団領が起源であり、公国に昇格したものの17世紀初めに公家が断絶した。公位は帝国内のブランデンブルク選帝侯が継承し、プロテスタントの同君連合が形成された。当初プロイセンは近隣の強国のポーランド・スウェーデンの影響下にあったが、三十年戦争後、フリードリヒ=ウィルヘルム(大選帝侯)が両国の争いに乗じて自立性を強め、また領土を拡大した。大選帝侯は、プロイセン国内における絶対王政への歩みも進め、地方の領主貴族(ユンカー)の農奴支配を認めるかわりに議会の無力化し、他方でユンカーを中央政府に登用して常備軍と官僚制を整えた。またフランスから亡命したユグノーを受け入れて最新の産業技術を採用した。

1701年にプロイセンは王国となった①。国王フリードリヒ=ウィルヘルム1世は富国強兵策を進めたが、一度も対外戦争をせず、財政の均衡を保った。強力な軍隊と健全な財政を引き継いだフリードリヒ2世(大王)は、オーストリアの大公位継承問題に乗じてオーストリア継承戦争をしかけて勝利し、つづく七年戦争でもイギリスと同盟してオーストリア・フランス・ロシアに辛勝し、地域の大国としての地位を守った。

1701年にプロイセンは王国となった①。国王フリードリヒ=ウィルヘルム1世は富国強兵策を進めたが、一度も対外戦争をせず、財政の均衡を保った。強力な軍隊と健全な財政を引き継いだフリードリヒ2世(大王)は、オーストリアの大公位継承問題に乗じてオーストリア継承戦争をしかけて勝利し、つづく七年戦争でもイギリスと同盟してオーストリア・フランス・ロシアに辛勝し、地域の大国としての地位を守った。

リア大公国は、大公であるハプスブルク家の当主が神聖ローマ皇帝ことで帝国の中核をなしてきたが、三十年戦争後の帝国の実質的崩壊により、皇帝はたんにオーストリアの君主に等しい存在となった。しかし、こののちハプスブルク家とオーストリアの威信はむしろ増大した。オーストリアは、16世紀に神聖ローマ帝国を圧迫していたオスマン朝を1683年の第二次ウィーン包囲戦で撃退し、99年にはカルロヴィッツ条約でハンガリーなどを奪回した。その後もオスマン朝に対する優勢は続き、加えてスペイン継承戦争で南ネーデルラントや南イタリアを得るなど②、18世紀にも領土を拡大した。ただし、マジャール人のハンガリーやチェコ人のボヘミアなど、非ドイツ系人口を多数派とする地域を支配下においたことは、その後の中央集権化を進めるうえでの難題となった。

18世紀前半のハプスブルク家は男子の継承者に恵まれず③、1740年にマリア=テレジアが大公位を継承すると、領土分割をもくろむ諸国が異議をとなえ、オーストリア継承戦争となり、豊かなシュレジエン地域をプロイセンに奪われた。その後オーストリアは、プロイセンとの対抗上、イタリア戦争以来の仇敵フランスとも接近したが(外交革命)、七年戦争ではプロイセン



変化がわかりやすいように表現を工夫しています。

18世紀半ばのヨーロッパを屈服させることはできなかった④。しかしマリア=テレジアは、行財政・軍制・教育の改革などを導入し、オーストリア中興の祖となった。

これらの諸国は、18世紀半ばに啓蒙専制と呼ばれる体制のもとで様々な改革を導入した。代表的な啓蒙専制君主であるプロイセンのフリードリヒ2世は、農工業の保護育成をはかり、拷問や検閲を廃止し、宗教寛容令を発した。またロココ様式のサンサーシ宮殿を建て、アカデミーも復興させ、自身も狩猟や舞踏よりも読書を愛し、音楽家バッハや思想家ヴォルテールらを宮廷にまねいたため、ベルリンでは文化が花開いた。オーストリアのマリア=テレジアやヨーゼフ2世も同じく死刑・拷問を廃止し、修道院を解散し、宗教寛容令を発した⑤。ウィーンは、モーツァルトらの音楽家が集い、オペラの本家イタリアと並ぶ音楽の都ともなった。またプロイセン・オーストリアでは、当時のヨーロッパでは例外的に初等教育が普及していた。ロシアのエカチェリーナ2世も商工業を奨励する一方で文芸を保護し、デイドロと文通した。また、社会福祉や初等教育制度を充実させ、宗教寛容令を発した⑥。

④プロイセンとオーストリアのあいだでの、ドイツの盟主をめぐる争いは、プロイセン=オーストリア戦争(1866年(→p.261))まで続いた。



マリア=テレジアとヨーゼフ2世

⑤ヨーゼフは農奴制の廃止も試みたが、この措置は官僚・軍部の中軸となった貴族層の弱体化をまねくため、ほとんど実現しなかった。

⑥ただしロシアでは農奴反乱が頻発し、これに対処するためにエカチェリーナは農奴制の強化および地方統治体制の改革をおこなった。

しかし、啓蒙専制の改革は上から与えられるものにとどまり、人民の政治参加はみられなかった。自らを「国家第一の僕」とみなしたフリードリヒ2世は、君主は人民の幸福と公共の福祉に責任を負うとした一方で、こうした重責にある君主の強大な権力は正当化されると考えた。啓蒙専制主義は、中・東欧の後進国の君主が、英・仏などの先進国に対抗して、自らの強力なリーダーシップのもとで富国強兵策を進めるためにとった統治姿勢であった。

第IV部

諸地域の統合・変容

福沢諭吉(1834~1901)は、幕末の長崎・大坂・江戸で蘭学を学んだのち、渡米・渡欧の機会を得て欧米に関する知見を深め、明治維新後は、学校の設定や新聞の創刊を通じて日本のオビニオンリーダーとなった人物である。彼が書いた『学問のすゝめ』(1872~76年)は、明治時代最大のベストセラーの1つとなった。以下は、『学問のすゝめ』初編(1872年)の冒頭部分である(一部省略)。

同時代の日本の資料を取り上げ、近代における思想の影響関係を考察させることで、世界史のなかの日本を意識して、学習をすすめることをうながします。

資料からの問い

- ① 最初の一文「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」とは福沢自身の考えを述べたものではなく、アメリカ独立宣言の引用である。それでは、なぜ福沢は、明治維新直後の日本において、アメリカ独立宣言を紹介しようとしたのだろうか。
- ② 福沢によれば、人間の価値は何によって決まるのだろうか。福沢がそのことを『学問のすゝめ』の冒頭で強調しているのは、なぜなのだろうか。

天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の靈たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。その次第甚だ明らかなり。実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるに由りて出来るものなり。……諺に云く、天は富貴を人に与えずしてこれをその人の働きに与うるものなりと。されば前にも言える通り、人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。

(福沢諭吉『学問のすゝめ』より)

第IV部の前半は18世紀後半から19世紀にかけての「近代」と呼ばれる時期を扱う。今日の社会の基本的な枠組みはこの時代に形づくられたといつてよい。欧米諸国は、豊かなアジアに追いつき追いこすために、産業革命を促進して生産性を向上させ、ナショナリズムを土台とする国民国家を建設するこ



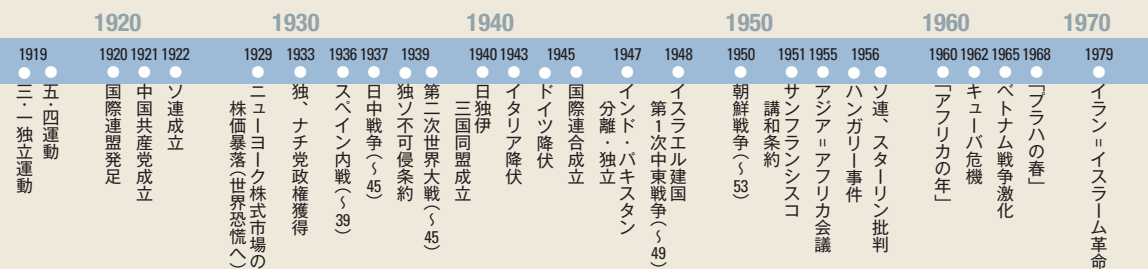
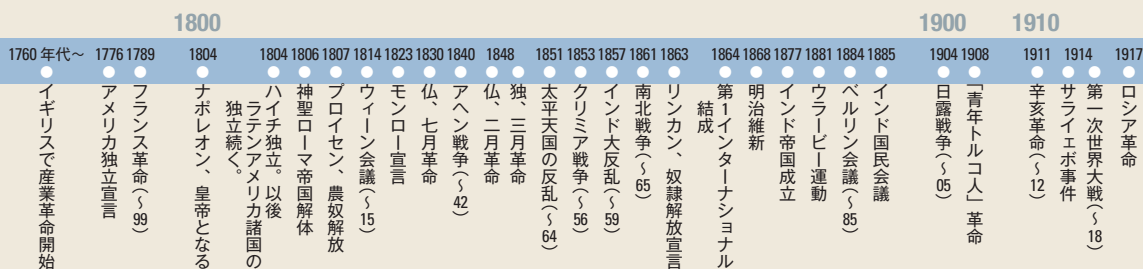
1880年代の世界

資料と同時代の世界の地図を配置し、その背景への理解を深めます。

とに邁進した。それにともない、自由主義社会が創出されていった。

しかし、近代の理念の背景には欧米諸国による世界支配の拡大という現象があった。植民地化の到来である。アジア・アフリカなど、植民地化の対象となった諸地域の人々も、この事態に様々なかたちで対応しようと試みた。

- 5 近代化による技術革新は、たしかに一方で人々の生活を豊かにしたが、悲惨な戦争も引き起こした。第IV部後半は二度の世界戦争と、その終結後の世界を扱う。この時期にはヒトラーのナチズムやスターリンの社会主義など、それまでの歴史には存在しなかったような徹底した全体主義支配も登場した。そして大量の戦死者を出した世界大戦後、その反省のうえに国際連合などの
- 10 新しい世界秩序を構築する動きがみられたが、また米ソ二大陣営の対峙する、冷戦という新たなかたちの戦争に突入した。



国民国家と近代民主主義社会の形成

18世紀のイギリスでは、国内での経済成長、大西洋三角貿易による富の蓄積や対インド貿易の拡大を背景に、産業革命がおこった。産業革命は19世紀に入り他の欧米諸国に波及する一方、経済や社会の構造を転換させ生活様式や価値観をも一変させた。イギリスはフランスとの争いのなかで北アメリカ植民地を拡大したが、本国の支配強化に対し植民地の人々は抵抗し、アメリカ大陸初の独立国家であるアメリカ合衆国が誕生した。このアメリカ独立を支援したフランスでは旧来の身分制社会の矛盾に財政危機が重なり、フランス革命がおこった。フランス革命の激動のなかで皇帝となったナポレオンが革命の理念を掲げてヨーロッパを制覇するが、他の列強が結束して彼を退けた。ナポレオン後のヨーロッパでは保守的なウィーン体制が成立したが、フランス革命が生み出した自由主義やナショナリズムを掲げウィーン体制を突き崩そうとする動きが高揚するなかで、「諸国民の春」によってウィーン体制は崩壊した。



これまでに扱った箇所との関連も考察させ、つながりを意識しながら変化をとらえられるようにしました。

- ① なぜイギリスで最初に産業革命がおこったのか、考えてみよう。
- ② アメリカ合衆国の独立がなぜ「革命」と呼ばれているのかについて、独立に至る経過や独立後の国家体制の点から考えてみよう。
- ③ 18世紀後半のプロイセンやオーストリアでおこなわれた改革が、フランス革命に与えた影響について考えてみよう。

1 商業社会と産業革命

商業社会の成立

大航海時代から七年戦争に至るヨーロッパ諸国の政治的・経済的な覇権争いのなかで、最終的に優位に立っ

たのがイギリス①である。

イギリスでは、名譽革命の結果、規制や特権の廃止と私的所有権の保障が実現された②。それによって、様々な産業部門において、商品生産に乗り出したり技術革新に挑んだりする誘因が高まった。また、農村部では、輪作を中心とする新しい農法が導入されて生産性が高まったため、農業経営者が地主から土地を借りて営む市場向け穀物生産が広まるとともに、新農法の導入を容易にするための土地の集約(第2次囲い込み)が議会主導で進められた(農業革命)。さらに、世界の一体化が進むなかで、植民地との交易や外国貿易を通じて様々な物産が流入し、取引と消費の対象となった。品の生産・取引・消費が、政治・経済・人間関係の基盤をなす社会である「商業社会」が誕生した。

この事態を反映して、18世紀のイギリスでは、人々の関心が商業の一環としての貿易、とりわけ貿易収支に集まった。国家の介入によりなるべく多くの商品を生産・輸出して、外貨すなわち貴金属を獲得し、貿易黒字を拡大することが望ましいという理論である重商主義が公論の支持を得、さらには政策に影響を与えた。

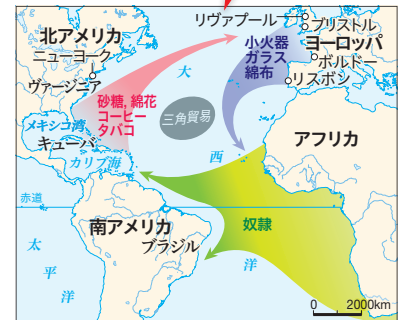
その際に大きな問題となったのが対アジア貿易である。すなわち、環大西洋貿易については、武器などをイギリスから西アフリカに輸出し、黒人奴隷を購入して南北アメリカで売却し、ラテンアメリカでは砂糖など、北アメリカでは綿花などを購入してイギリスにもち帰るという三角貿易が機能し、全体として貿易黒字が実現されていた。これに対して対アジア貿易では、中国から茶や陶磁器を、インドから綿織物を、おのおの輸入し、銀をはじめとする貴金属で代金を支払うという一方向的な貿易パターンが成立し、貿易赤字が常態化していた③。対アジア貿易は、重商主義からすると好ましくない状況にあったのである。

この事態を打破するには、陶磁器や綿織物など国内で生産が可能な輸入商品については国内生産を試み、茶など国内生産が不可能な商品については植

①グレートブリテン(イギリス)王国は、1800年に連合法を制定してアイルランド王国と国家合同し、翌年「グレートブリテンおよびアイルランド連合王国」となった。なお、日本ではこの連合王国もイギリスと通称される。

②それまでは国王・政府が恣意的に所有権を制限することが可能であり、そのことが人々の生産意欲をそそがって

ヒトやモノの流れがわかりやすくなるような地図を挿入しています。



三角貿易 大西洋の三角貿易の需要により、イギリスのブリistol・リヴァプールなどの港の後背地で輸出産業が進み、産業革命の前提が整った。

③このうち綿織物については輸入禁止(1700年)と使用禁止(20年)が法制化されたが、実効性は不十分なものにとどまった。

2 アメリカ革命

背景や経緯の説明にも多くの紙幅を割き、複雑な歴史的事象への理解が深まるような記述をこころがけています。

13植民地から合衆国へ

北アメリカでは、大航海時代のなかで、ヨーロッパ各国の進出が始まった。このうちオランダ

は、西インド会社を設立(1621年)するとともに、大西洋岸に植民地を設置した。フランスは、17世紀以降、ケベックを中心とするカナダや、内陸部

あるルイジアナに、広大な植民地を得た。イングランド(のちにイギリス)は、16世紀末から、ヴァージニアを皮切りに、東部で植民地化を進め、18世紀には植民地数は13にのぼった。

これら諸国の植民地獲得競争のなかで、最終的に勝利したのはイギリスである。同国は18世紀に入り、スペイン継承戦争や七年戦争(北米ではフレンチ=インディアン戦争)の勝利を経て、カナダ、ミシシッピ川以東のルイジアナ、フロリダなど、北アメリカ東部の大部分を植民地化することに成功した。

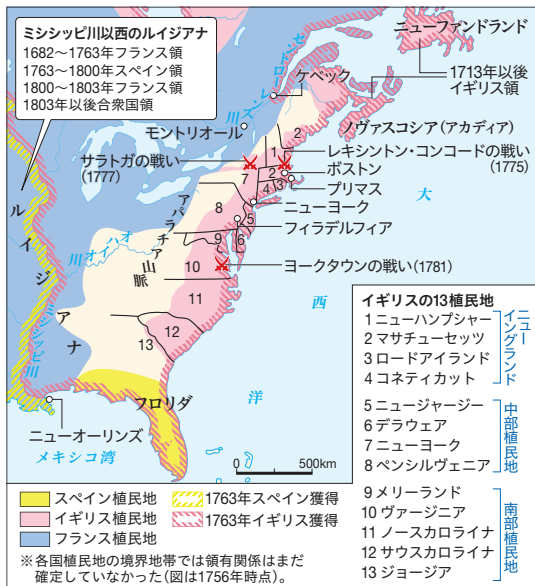
ただしイギリス植民地の経済構造には地域差があった。北部では、小麦などを栽培する農業・製鉄業・造船業が発達した。これに対して南部では、タバコ・

米・藍を生産する大農園(プランテーション)が普及し、その労働力を調達する方策として、西インド諸島から黒人奴隷制度が移植された。

本国政府は、当初、植民地を発展させることを重視し、入植者に様々な権利を認めた。その結果として自治の気風が広がり、各植民地には植民地議会がおかれ、しばしば本国政府から派遣された総督とともに政治を担った。

とりわけ北東部ニューイングランド植民地では、メイフラワー号で渡ってきたピルグリム=ファーザーズ(1620年)に代表されるような宗教的理由によるピューリタン入植者が多かったが、彼らは教会を中心とする小規模村落であるタウンに集住し、プロテスタンティズムの自主的な教会運営精神にならって、住民集会であるタウン=ミーティングで政治的な決定をおこなうという直接民主主義的な自治制度をつくりあげた。

1763年に七年戦争が終わると、本国政府は植民地政策を転換し、積極的



植民地時代の北アメリカ東部
(1750年頃)

に介入する方針に転じた。戦費負担などによって財政状況が悪化したため、貿易統制や課税強化などによる国庫収入の増加がめざされたからである。

植民地では、この政策転換は自治に対する攻撃・侵害ととらえられ、課税の強化に反対する植民地議会が集まって「代表なくして課税なし」の原則にもとづく抗議声明を出すなど本国政府に対する批判と不満の声が高まった。

新しい政策に対する抗議行動である「ボストン茶会事件」(1773年)が発生すると、本国政府はボストン港封鎖などの懲罰措置でこたえた。これに対し、ジョージアを除く12の植民地はフィラデルフィアで第1回大陸会議(74年)を開催し、植民地全体として本国に抗議した。レキシントンとコンコードでイギリス軍とマサチューセッツ民兵が衝突すると(75年)、各植民地は本国からの武力による独立(アメリカ独立戦争)という選択に傾き、トマス=ペイン『コモン=センス』などの影響もあって、個々に独立を宣言する植民地が出現しはじめた。

衝突直後に13植民地が開催した第2回大陸会議では独立の方針が支持を得、ワシントン(最高司令官とする植民地軍が本格的な戦闘を開始した。1776年7月4日には、ジェファソンが起草した「13のアメリカ邦連合」の独立宣言が公布された。独立宣言は、ロックの社会契約論を援用しつつ、政府の目的は個人の自由や権利の擁護にあり、政府が権力を乱用した場合、個人は



資料を読み取り、これまでの学習内容と比較させたり、関連性を見出させたりする問いを通じて、扱っている歴史的なできごとの意義の考察をうながします。

資料から考える アメリカ革命

- この宣言によれば、社会のなかで最終的に権力をもつものは何か。それは前の時代とどうかわっただろう。
- 植民地の人はなぜ印紙法を「代表なくして課税なし」というスローガンをういて批判したのだろう。



「独立宣言」 1776年7月4日、大陸会議はフィラデルフィアで独立宣言を公布した。中央に立っているのは、フランクリン・ジェファソン・アダムズら5人の起草委員である。

アメリカ独立宣言 (抜粋)

われわれはつぎのことが自明の真理であると信ずる。すべての人は平等につくられ、神によって、一定のゆるぎのない権利を与えられていること。そのなかには生命、自由、そして幸福の追求が含まれていること。これらの権利を確保するために、人類のあいだに政府がつくられ、その正当な権力は被支配者の同意に基づかねばならないこと。もしどんなかたちの政府であってもこれらの目的を破壊するものになった場合には、その政府を改革しあるいは廃止して人民の安全と幸福をもたらすにもっとも適当と思われる原理にもとづき、そのようなかたちで権力を形づくる新しい政府を設けることが人民の権利であること。以上である。

……現在のイギリス王の歴史はたびかさなる侮辱と権利侵害の歴史である。すべては、わが諸州のうえに絶対専制政治を打ちたてることを直接目的としているのである。以上のことを立証するために、公正な世界に向かってあえて事実を提出する。(江上波夫監修「新訳世界史史料・名言集」)



ヴェルサイユ条約の調印 かつてヴェルサイユ宮殿「鏡の間」が会場に選ばれた。前列左から5人目がアメリカのウィルソン大統領、その右がフランスのクレマンソー首相、イギリスのロイド＝ジョージ首相。



①あわせて結ばれたものに1919年のサン＝ジェルマン条約(連合国とオーストリアの講和条約)、ヌイイ条約(連合国とブルガリアの講和条約)、1920年のトリアノン条約(連合国とハンガリー王国の講和条約)、セーヴル条約(連合国とオスマン朝の講和条約)がある。

後の時代のできごとの背景となる歴史的な問題についても詳述しています。

②ドイツは海外領土のすべてを失ったほか、アルザス・ロレーヌをフランスに返還し、ドイツ西部のラインラントの非武装化を義務づけられた。これによって、ドイツは人口の約10%、ヨーロッパにおける領土の約13%を失った。さらに軍備にも制限が課され、賠償金は戦前のドイツ通貨単位で1320億マルクとなった。

③ドイツへの軍備制限も、建前上はドイツが率先して軍縮を実行していた。巨額な賠償金も、金額確定前にドイツ側から支払い用意があることが表明されていた。

ヴェルサイユ体制の成立

1919年1月、連合国はパリ講和会議を開催して、賠償や戦後の秩序について交渉したが、

この会議で合意されたヴェルサイユ条約①で定められた原則にもとづいて構築されたヨーロッパの秩序をヴェルサイユ体制という。ここではウィルソン大統領の十四カ条提案が強い影響力を發揮し、これまでヨーロッパの国際関係にはなかった画期的な原則が、この会議で盛り込まれた。

その最たるものは、集団安全保障の思想を制度化した国際連盟League of Nationsの設立である。不十分な点が多いとはいえ、ある加盟国に対する攻撃をすべての加盟国に対する攻撃とみなし、攻撃された国を防衛する義務を負わせるという仕組みは、国際社会の歴史ではじめての試みであった。民族自決の原則が国際社会で明確に支持されたのも、はじめてであった。この結果、オーストリア＝ハンガリー帝国やオスマン朝が解体され、ロシアの領土も縮小した。東欧やバルカンでは多数の国が新たに独立国となった。ただし、民族が複雑に入り組んで居住している地域では、民族自決は無限に小集団の独立をうながすものの、そのなかに依然としてさらなる少数派を抱えこむことを意味した。国際社会は、民族自決原則をどこまで徹底的に適用するのかという新たな難問に答えを見出すことはできなかった。

ドイツに対する賠償も困難な問題であった。ドイツへの報復を求める国民の声と、それを代表するフランス・イギリスの指導者たちは、寛大な措置を求めるウィルソンの要求を拒否した。ウィルソンはフランスやイギリスが彼に従うことを期待したのみで、参戦前にフランスやイギリスからより大きな譲歩を確約させていなかった。結果、レーニンやウィルソンの主張よりドイツにきびしいものとなった②。ただし、独立したポーランドへの領土割譲を除き、ドイツ本国の領土と経済構造は基本的にそのまま残り、ドイツは依然として人口・経済力いずれにおいてもヨーロッパの大国にとどまることが許容された③。なお、ドイツ代表はまねかれなかったものの、主権国家対等の原則のもとに会議が運営されたのも、パリ講和会議の特徴であった。

第一次世界大戦の歴史的意味

第一次世界大戦は誤算の連続であった。戦前には、経済的に相互依存関係が進んだヨーロッパの主要国間で、もはや本格的な戦争はおきないと認識すら存在していた。これは、今日の世界を含めて、どの程度経済的相互依存が進むと戦争を防ぐことができるのかという、興味深い理論的問題を提起している。

バルカン半島の小さな事件が、ヨーロッパの主要国だけでなくその他の国々も巻き込む巨大な戦争となり、それが4年以上も続くと思われた同時代人もほとんどいなかった。兵器の高度化もめざましかった。機関銃・戦車・毒ガス・戦闘機は戦場を大量殺戮の場にかえた。同時に、この戦争は軍人だけが従事する戦いではなく、経済力を含め国家の総力をあげた戦いとなり、民間人も全面的に巻き込んだ戦争となったという意味で、全体戦争であり、総力戦であった。政府は経済統制を強め、また食料配給制などを導入した。膨大な数の戦争の犠牲者が出たが、これも予想の範囲外であった。

戦争の終わり方も、当初の予想外であっ



兵器工場で働く女性 イギリスの砲弾製造工場で働く女性たち。男性労働者の多くが前線に送られたため、軍需工場で働く女性が増加した。その生産力が戦争を左右するようになり、戦後に女性の社会進出をうながした。

▶ 第一次世界大戦に参戦した国々の国民は、なぜ総力戦を受け入れていったのだろうか。その理由として考えられることをまとめてみよう。また、第一次世界大戦の歴史的意味についていろいろな角度から考えてみよう。

コラムに対しても問いを設け、さらなる課題の探究をうながします。

国際平和の思想と国際連盟

国際連盟は1920年に発足した史上初の国際平和機構であり、スイスのジュネーブに本部をおいた。第一次世界大戦の反省のうえに、アメリカのウィルソン大統領の強いイニシアティブのもとに設立された。しかし、アメリカは上院が批准を拒否したために連盟に加盟できず、またドイツやソ連も最初は加盟を認められない(それぞれ26年と34年に加盟)など、当初から誤算続きであった。早くも33年には日本とドイツが、37年にはイタリアが脱退し、39年にはソ連がフィンランド侵略のため除名となっている。

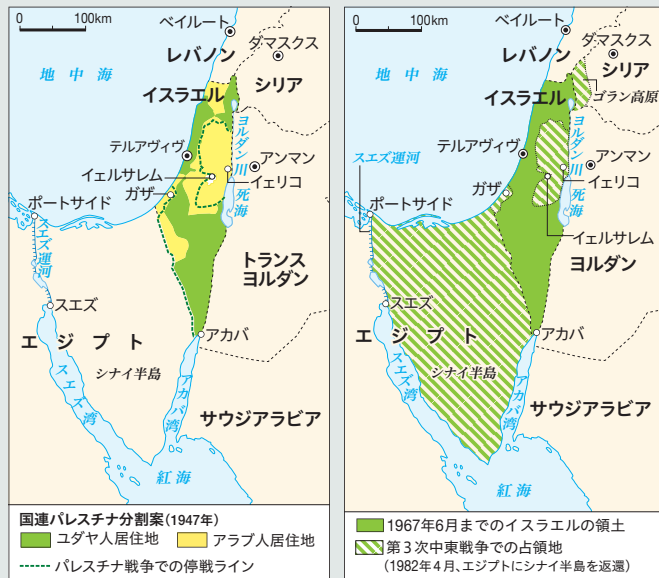
発足当初の常任理事国はイギリス・フランス・イタリア・日本であった。ただし、常任理事国に強力な権限を与えた国際連合(→p.341)と異なり、総会が最高決定機関

とされ、またその決定は全会一致であることが要求されていた。そのために、決定をくだすのは容易でなかった。また、連盟として軍隊を組織することはできず、発動することができるのもっともきびしい制裁も経済制裁にとどまっていたため、侵略を抑止し、あるいは実効のある制裁を科すことができなかった。

しかし、常任理事国に対しても制裁を科すことは可能であり、この点はそれが実質的に不可能な現在の国際連合よりすぐれているとの指摘もある。いずれにせよ、史上初の国際的な集団安全保障機構としての意義は大きく、第二次世界大戦後に設立された国際連合は、国際連盟の経験をもとに様々な修正を加えて制度設計がなされている。

▶ 国際連盟は第一次世界大戦の反省のうえに設立されたものであったが、その後の国際政治においてどのような役割を果たしたのだろうか。

Q▶ 第2次中東戦争で英・仏・イスラエルのエジプト攻撃を、なぜアメリカが反対したのか、考えよう。
 Q▶ パレスチナ難民はどのようにして発生し、現在どのような状況にあるのか、調べてみよう。



第1次中東戦争後 第3次中東戦争後



パレスチナ難民のキャンプ
 第3次中東戦争では、イスラエルがヨルダン川西岸やガザ地区などを占領したので、多くのパレスチナ人が故郷を追われて難民となった。

ゴラン高原に進攻するイギリス製のイスラエル軍戦車 イスラエル軍は、米・英からの武器支援を受けた。



イスラエル建国 1948年5月14日、前年のパレスチナ分割会議にもとづきテルアヴィヴでイスラエルの建国が宣言された。建国を宣言するベングリオン初代首相(在任1948～53、55～63)。



現代な課題についてもとりあげ、歴史的背景と現在の状況をつなげて考察することをうながします。

ころ、これに反発したイギリス・フランスはイスラエルを加えた3カ国で、アメリカの反対にもかかわらずエジプトを攻撃し、ここに第2次中東戦争(スエズ戦争)が始まった。しかし、アメリカの要求に屈するかたちで、3国は不本意ながら停戦に応じ、結局ナセルは運河国有化を実現した。

1967年、エジプト・シリア・ヨルダンとイスラエルのあいだに第3次中東戦争が勃発した。イスラエルはシナイ半島・ガザ・ヨルダン川西岸・ゴラン

キャンプ=デーヴィッド合意 キャンプ=デーヴィッドは、ワシントン郊外にある米大統領の別荘。1978年9月、カーター米大統領の仲介で、エジプトのサダト大統領とイスラエルのペギン首相(1913～92(在任1977～83))が国交正常化に合意した。



パレスチナ暫定自治協定 クリントン米大統領(1946～(在任1993～2001))の仲介によるオスロ合意の結果、PLOは武装闘争路線の放棄を約束し、イスラエルとのあいだにパレスチナ暫定自治協定を締結した。PLOのアラファト議長(1929～2004(在任1969～2004))はイスラエルのラビン首相(1922～95(在任1974～77、92～95))とともにノーベル平和賞を受賞した(1994年)。暫定自治のためのパレスチナ自治政府はPLOを基盤に設立され、94年にはヨルダンもイスラエルと平和条約を締結した。

高原・東エルサレムなどを占領し、これによりそれまでアラブ民族主義の象徴的存在であったエジプトのナセル大統領の権威は失墜した。

ついで1973年、エジプトとシリアは失地回復を目的に掲げてイスラエルに攻撃を開始した(第4次中東戦争)。この時、アラブ石油輸出国機構(OAPEC)はイスラエル寄りの国に対して石油輸出を制限し、石油輸出国機構(OPEC)は石油価格の大幅な引き上げを断行したが、これは安価な石油に依存していた世界経済に打撃を与え(第1次石油危機<オイル=ショック>)、世界的な不況を引きおこした。アラブ側は戦闘ではじめて善戦し、イスラエルに対する立場を強めた。エジプトの新しい指導者サダトは、その後アメリカのカーター政権の仲介を得てイスラエルとの和平交渉に乗り出し、アラブ諸国が反対するなか79年エジプト=イスラエル平和条約に調印した(78年のキャンプ=デーヴィッド合意にもとづく)。

パレスチナ人の代表であるPLO(パレスチナ解放機構)は当初武装解放路線であったが、アラブ諸国の一致した支持は得られず、88年にイスラエル打倒から「イスラエルと共存するヨルダン川西岸地区およびガザ地区でのパレスチナ国家建設」へと方向転換をおこなった。さらに93年、イスラエル政府とPLOの相互承認とガザ地区・ヨルダン川西岸地区におけるパレスチナ人の暫定自治を定めたオスロ合意が成立した。この合意は、パレスチナとイスラエルの平和的共存の可能性を示唆した。

歴史の流れがわかりやすいように、一連のできごとをまとめて記述しています。

6日間の電撃作戦でイスラエルの占領地はそれまでの4倍以上に拡大した。シナイ半島は1982年エジプトに返還された。

Q キャンプ=デーヴィッド合意とオスロ合意におけるイスラエル・エジプト・PLO、そしてアメリカの思惑について考えてみよう。



石油危機 石油危機の影響は、1970年代に入るまで世界最大の石油産出国であったアメリカにもおよんだ。写真は品切れで臨時休業に追い込まれたガソリンスタンド。

『新世界史』の特色

1 現代世界を知るための歴史的視座を養う教科書

- **歴史の流れ**がわかりやすい記述、出来事の**歴史的背景**が理解できるように意識した叙述に努めました。
- 世界史を学ぶうえで**キーとなる概念**や、**現代の諸問題の背景**となる事項について、70を超える「コラム」を設けて、深掘りし、難関大入試の論述対策にも使えるくわしい解説をしています。

2 「考える」「理解する」「追究する」教科書

- 400近くの間いを用意しました。各章の冒頭にはその**章の重要事項に関わる問い**を、章末には**まとめとなる問い**を置き、歴史の大きな流れを構造的に意識できるよう工夫しています。
- 本文中にも数多くの問いを設け、生徒が自身で調べ、考え、発見することを通して、**歴史的な考え方や課題の追究の仕方**を学べるよう留意しました。

3 図版・地図・史資料を読み解く力がつく教科書

- 「**資料から考える**」のコーナーをもうけました。写真や地図、図表で読み解く技能が身につくような発問も付しています。
- 文字史料も20ほど用意し、それぞれに問いを付し、**読み解く視点**を示しました。

『新世界史』の著作者

[著作者]

| | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------|
| 羽田 正 | 東京大学特任教授 | 丹羽 敬 | 愛知県立明和高等学校教諭 |
| 岸本 美緒 | お茶の水女子大学名誉教授 | 小川 正樹 | 函館ラ・サール高等学校教諭 |
| 久保 文明 | 東京大学名誉教授・防衛大学校長 | 加藤 修治 | 武蔵高等学校中学校教諭 |
| 南川 高志 | 京都大学名誉教授・佛教大学特任教授 | 岸本 次司 | 元鳥取県立鳥取西高等学校教諭 |
| 小田中直樹 | 東北大学教授 | 岡本 聡 | 白陵高等学校教諭 |
| 勝田 俊輔 | 東京大学教授 | | |
| 千葉 敏之 | 東京外国語大学教授 | | |

B5変型判 (230mm×174mm) 410頁

| | | | | | |
|----------|------|----------|------|----------|---------------|
| ● 図版(写真) | 487点 | ● 地図 | 141点 | ● グラフ・図表 | 26点 |
| ● 文字史料 | 20点 | ● 二次元コード | 30点 | | (グラフ8+図10+表8) |



山川出版社

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13
TEL 03-3293-8131 FAX 03-3292-6469

<https://www.yamakawa.co.jp/>